

石上 玄一郎（いしがみ・げんいちろう）

1、プロフィール

小説家。後年精力的に仏教説話を発表。大阪成蹊女子短大教授を務める。作風は幻想的、観念的な傾向を特色とし、文壇的には孤立しながら少数の理解者に強く支持されている。

<生没>

1910(明治 43)年3月 27 日 ~ 2009(平成 21)年 10 月5日

<代表作>

「乾闥婆城」「精神病学教室」「氷河期」「自殺案内者」「黄金分割」「蓮華照応」
『太宰治と私－激浪の青春』

<青森との関わり>

旧制弘前高等学校時代の3年間、弘前市で学生時代を送る。同学年に太宰治がいた。

2、作家解説

札幌市生まれ。従来の「いそのかみ」は誤読。昭和 56 年頃から正された。本名上田重彦。父寅次郎は有島武郎と親交があり、有島の『小さき者へ』の隣家の U 氏、『死とその前後』の下田さんのモデルである。作家志望であった父は、中学教師のかたわら「北海タイムス」等に歴史物を書いていた。若くして逝った父は、玄一郎に小説家への夢をつなぐ。

母も早く世を去り祖母と父の郷里盛岡に移る。旧制盛岡中学から旧制弘前高校へ進む。太宰治が同学年であった。新聞雑誌部の発行責任者となり創作、評論を書く。社会運動の波に巻き込まれ、卒業まぎわに検挙、放校される。放浪、窮乏、デカダンスの日々を送るが、親代わりの祖母の死にあい悔悟し、聖書や仏典に対する関心が生じる。

同郷の原奎一郎、鈴木彦次郎らの同人誌「大鴉」(昭和 10 年8月～11 年4月)に参加、創作への情熱を燃やす。昭和 10 年処女作「颯」を陸中巖の筆名で発表。石上玄一郎のペンネームは 14 年「針」で初めて使用。次いで「魑魅魍魎」等が好評を博し、15 年『絵姿』で作家としての地位を確立した。

18 年の代表作「精神病学教室」は、科学とヒューマニズムの対立を描いた作品だが、素材を提供した津川武一が東大医局を追われるという波紋を生んでいる。中日文化協会に就職、上海に渡り、やがて終戦。23 年「氷河期」により創作活動を再開する。

アナキズムから共産主義思想にいたる西欧の革命思想を学び、仏教に傾倒し、更に土俗への関心を深める石上文学は、複雑な地層の文学世界を構築している。

3、資料紹介

○『絵姿』

図書

1940(昭和 15)年8月1日

190mm×135mm

石上玄一郎の第一創作集。「針」「魑魅魍魎」「乾闥婆城」「颯」「絵姿」を所収。作家として地位を確立した作品集である。郷里の伝説や歴史が素材。「乾闥婆城」は南部藩を舞台の歴史小説。総じて、郷土色の濃い、作者の原風景取材の幻想的な作風が見られる。